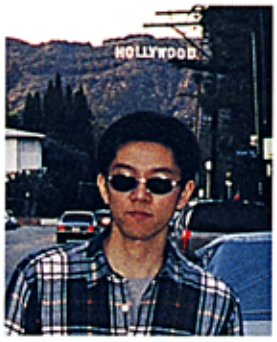
ワールド・レポート

World Report

世界のフイルムコミッション制度視察から

世界的映像素材としての北の道の可能性



道央フイルムコミッション研究会幹事
石狩サポーターズ@長々緑でネガ？代表
石狩市役所職員
奥山 直樹

■「道(みち)」とロードムービー

映画には「ロードムービー」といわれる旅物語の1ジャンルがあります。大ヒットした『レインマン』というハリウッド映画がそうでした。ロードムービーの大家ヴィム・ベンダースの『パリ・テキサス』(1984) をはじめとする彼の一連の作品群は名作揃いです。フェリーニのその名も『道』(1954)。山田洋次監督によるジャパニーズ・ロード・ムービー『幸せの黄色いハンカチ』(1977) は、北海道を舞台に、若い男女と中年男が偶然出会い、旅を続ける物語でした。

何故に、このような作品が名作たりうるのか。一つは脚本の構成力、監督の力によるところがあると思いますが、それと同時に映画の中では、旅行（主人公の移動）がもたらす「精神の彷徨（ほうこう）」ののちの主人公の心の変化、成長がおきるところにロードムービーの醍醐味があるといえるでしょう。

この「精神の彷徨の旅」には「道（みち）」がとっても重要な役割を果たしています。「みち」は登場人物をA地点からB地点までの距離を繋ぐだけではなく、過去から未来へ人を運ぶタイムマシーンなのです。人はその中で何らかの心の変化、成長を経験します。それが映画の中で劇的なドラマを生み、我々に共感、感動を生むのです。ロードムービーの中では、道は道である以上に人生の道でもあり、重要な名脇役ともいえるでしょう。

■晩秋の北海道を舞台に士別から石狩を結ぶ映画『ホームシック』

石狩市には、木下恵介監督の大ヒットした映画『喜びも悲しみも幾歳月』で撮影された有名な灯台があり、いまだこの灯台がこの映画への想いをもつ旅人達の心の灯火をもたらしているため、観光客が絶えることがありません。この「映画の想い出」は石狩市の1つの大きな財産です。

映画というものは、普遍的でありつつも時代性と不可分な側面があります。私は残念ながら『喜びも…』をリアルタイムで鑑賞していません。ということは、当時のこの映画の大ヒットしたときの熱気を映画館で体験し、未だに遠方から訪れる方々の思いと、それを知らない私の世代のとは別のものです。残念ながら、時間の経過によって想い出は風化します。そのため『喜びも…』の灯台のほかに、石狩、厚田、浜益を結ぶルートなどには、映像によっていつ世界に出てもおかしくない風景がごろごろ転がっているのを見るにつけ、常日頃、我々と同時代に生きる若手映画監督に新たに石狩を撮影して頂けないだろうかと思ってきました。

そんなとき、『月とキャベツ』の篠原監督と出会い、実はこの映画の原作者が石狩市に在住であり、かつてこの映画のロケ地の候補地として助監督とともに石狩市を訪れたが、結果的には撮影は無かったことなどを伺いました。是非「石狩」で撮影して頂きたかったという思いをお伝えしたところ、以前この映画で助監督を努めていた水戸ひねき監督の北海道での撮影計画があるのでと、紹介して下さり、その石狩ロケをサポートすることになったのです。(写真－1と1')

この水戸ひねき監督の映画『ホームシック』は名俳優奥村公延氏が演ずる主人公が車で道を旅します。晩秋の北海道を舞台に、郷愁とブラックユーモアでつづるロードムービーで、ロケ地である士別と石狩の風景がとても見事に映画の中で「生きて」います。

けんか別れをした若い男女、大金を持って逃げる中年女性、元刑事など、行き場の無い男女が、故郷を目指す身よりのない老人、奥村氏演ずる「中村」の車に乗りあわせることになり、北海道の道を旅し、行く先々で様々な人間模様を展開する物語です。

写真ー1「ホームシック」の石狩ロケ、中央が水戸監督

写真ー1' 奥村 公延さん達と撮影の合間に写す（中央筆者）

「みち」はまたしてもこの映画の中で効果的な役割を果たしているのですが、特に後半雨に流れる歩道を登場人物の１人「明美」が歩くその風景などは、それ自体がもう1人の主人公といえるようでした。郷愁を北海道の風景が演じているのです。

この映画はベルリン国際映画祭 2000に出品され、石狩の風景がまさに世界の舞台へ出る瞬間になりました。

■周防監督の『Shall weダンス?』とアメリカ映画事情

このように映画の可能性を信じ、石狩の中で私的に活動していたある日、世界各地にはフイルムオフィスという、映画のロケを支えている部署を自治体が設けている（正確には、自治体が支援するＮＰＯ組織になっているところも多い）ことを、周防正行監督の著書「『Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ダンス？』アメリカを行く」で知りました。

この本によると、この映画は日本のアカデミー賞を受賞しただけでなく、その後、映画産業の国アメリカ各地で上映されることになり、アメリカでの日本映画としての最高の興行収入を得た映画でもあったそうです。この本はまた、映画産業先進国のアメリカの映画事情がとても良くわかる希有な本です。（ＦＣ情報のとても良い入門書です。）

その後、直接出会うことになった周防監督や桝井プロデューサーから、更に色々貴重な情報を得ることができました。また、当時私は、石狩市都市計画課職員として、まちづくり施策の仕事の渦中にいて、「映像」によるまちおこしの可能性について奮闘しておりましたが、田岡克介現市長が、文化的素養が非常に高く、大変な理解を示していただいたことも大きく影響して、周囲の理解、協力を得ることができ、ついに2000年2月中旬、私の北米研修が現実化したのでした。

■オレゴン州、映画'86『スタンド・バイ・ミー（Stand by Me）』の舞台へ。

幾度も映画の中で見たオレゴン州の風景は、まさに北海道そのものともいえる大自然でした。日本で以前放映された「オレゴン版“北の国から”」ともいえる『オレゴンから愛』というテレビドラマによって、今もなお日本の観光客がそのロケ地を観光していること、そしてこれは、日本観光客を呼び込むために、戦略的に日本のプロダクションに働きかけてこのドラマが作られたことを、州の観光担当の方から聞きました。

すなわち個人活動の範囲を超え、行政の支援を得て道内ネットワークを作ることができれば、北海道が世界的規模で格好のロケ地になり、更にオレゴン州のように主体的な映像文化の発信地になることさえできるのです。渡米3カ月前の12月上旬、函館港イルミナシオン映画祭に招かれ、シンポジウムパネラーとしてこのようなことを話し、FCの存在を北海道内に初めて知らせました。

州の観光担当の方に案内され、渡米後最初の目的地である「オレゴン州のフィルム・オフィス」を訪れました。「フイルム」という意味は「映画」ではなく、映像全般で、ＣＭ、テレビドラマもその対象です。州の観光部局とフイルム・オフィスは別組織で、それまであまり交流がなかったようですが、私の視察がきっかけで、この２つの組織が今後は情報交換をしていくことになったようです。

そもそもこのフィルム・オフィスなるものは、

ハリウッドの要請によって１９４０年代から各地に作られ始めました。撮影所で大掛かりなセットを組んで撮影していた映画が、よりリアルな素材を探しはじめたのです。そのとき、映画の素材として必要となるロケ地の風景情報や各地の協力体制が必要で、この組織はとても機能的に寄与してきたのです。警察、消防等の許認可、地域の宿泊情報や映像関連業者の紹介を「ワン・ストップ・サービス」で紹介します。ロケにまつわる諸費用の数%を州の補助金でペイバックするところさえたくさんあります。これらをフィルムコミッション制度（以下ＦＣ）といいます。

今や世界各国２７５カ所以上でＦＣが競いあい、お互いに情報交換をしながら、技術を高めあっています。ハリウッド映画は時に１本で１００億円もの予算が動く大規模な映画の完成保証の問題もあって、フィルム・オフィスの無い場所では撮影を行わないのが常識になりつつあります。裏を返せば、各地が、地元の経済振興（ロケ自体で地元に落とす巨額な一次的経済効果、ロケ地となったことでその後観光地となって潤う２次的効果）や文化振興のために様々な手段で競いあっているということは、映画産業としてもＦＣの制度がある所の方が何かと有利なので、結果としてその制度が無い日本のようなところは敬遠されてきたということでしょう。日本が存在しないのと同じということです。

今回私は、渡米に際し、『スタンド・バイ・ミー』という映画、ロードムービーが撮影されたロケ地を見ることを１つの目的としていました。誰もがもつ少年のころの想い出、小さな大冒険、ノスタルジー。

この映画が未だに多くの人々を引きつけてやまない秘密がオレゴンの大自然にあることを、このとき確信することになりました。

オレゴン州のポートランド市から南へ１１５マイル、ハイウェイで２時間ほど北上したところに、ユージーンという人口１３万人程度の小都市があります。『スタンド・バイ・ミー』の舞台です。私の住む石狩市は、札幌市郊外の平和で自然豊かな町として人口が延び続け、平成８年の市制施行によって「町」から「市」になったばかりの人口約５万５千人の若い市です。まだまだ手つかずの大自然があり、“はまなす薫る１０万都市・石狩”をキャッチフレーズにまちづくりを進めている石狩市で働く私は、近未来の石狩市ともいえるこのユージーンという町にとても惹かれました。

ユージーンはスタンド・バイ・ミーの世界そのものでした。

（写真－２　全長12.５マイルの遊歩道Row River Trailにかかる赤い鉄橋。映画の冒頭で少年４人の出発直後の印象的なシーンとして撮影された。この橋を越えることには未知なるものへの旅立ち、冒険という意味も感じられる。）

写真－2

■『ファーゴ』の舞台、ミネソタ州ミネアポリス郊外へ

世界にはカンヌ、ベネチア、ベルリンの三大映画祭のグランプリを始め、数多くの権威ある賞がありますが、アメリカ人はアカデミー賞がダントツに世界の映画の最高権威と考えているようです。今回の視察で、アカデミー賞の前日は酒場や町中至る所でその予想で盛り上がっていると聞き、アメリカの重要な輸出産業の１つである映像産業としての映画への位置付け、人々の認識の違いを肌で感じました。

そしてこのアカデミー賞の１部門も受賞した、ミネソタ州出身のコーエン兄弟による映画『ファーゴ』は片田舎の町で実際に起こった殺人事件を映画化したものです。その内容とは逆に北の町ミネソタの白い風景や登場人物がどこかユーモラスな印象さえ与えます。犯人達が車で疾走するシーンは見事な雪景色の夜の道路で、これが非常に効果的にスタイリッシュな感覚を与えます。車のヘッドライトが闇夜を照らし、未知の道を走るかのような疾走感が、見ている私達に、これから起きる何か先のわからぬ不測の事態、事件を予感させ、ぞくぞくとくる心理描写を与えています。象徴的、印象的な道の効果なのです。ひたすら続く白銀の道路がアメリカ中北部の田舎町の設定を見事に演じています。

この映画のロケに使用されたのは、ウオーリー・マッカーシーズという実際にも営業中の大型自動車ディーラーで、地元では独特なＣＭなどで大変有名な店とのことでした。

この映画の中では、「みち」と自動車が時間の

経過や映画空間の設定に非常に意味を持たせることに成功させています。

歴史的建造物の中にあるこの町のミネソタ州フイルムオフィスは、今でもこの映画を大切に扱い、ロケ地側の情報発信手段「ミネソタ州プロダクションガイド」の中でカラー挿し絵として代表的に

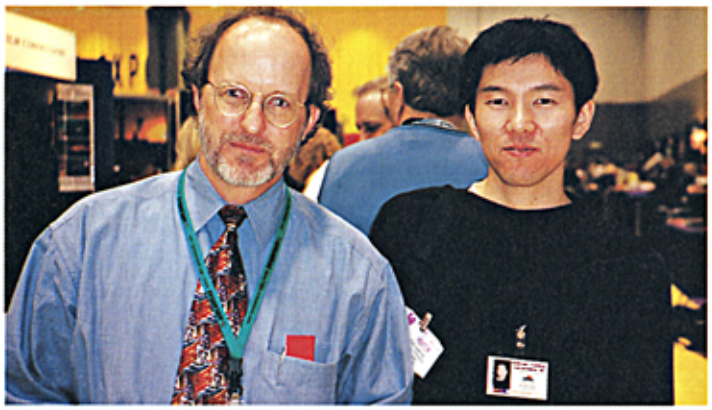
写真－3　ミネソタ州フィルムオフィスにて

取り上げています。いうまでもなく他にもかなりの映画、CMなどをこのフイルムオフィスはロケ誘致してきました。既に撮られた映画などのロケ情報の発信もまた重要なFCの仕事であり、これがまた新たなロケ需要を呼び込むのです。(写真－3)

どこまでも続く平坦な土地柄と雪景色、カナダと国境を接している北の州、ミネソタ。石狩市ならミネソタ州が参考になるだろうという周防監督からの情報通り、戸建て住宅が続いているミネソタ州ミネアポリス郊外はまさに石狩市の風景でした。

■世界のAFCI,ロケーションズ2000

本来初秋に渡米する予定を半年遅らせたのは、“ロケーションズ２０００”を最後に見て帰る予定を組んだからです。世界各地のフイルムオフィスが年１度、一堂に会し、会場内に設けられたブースで、それぞれのロケ地風景や、ロケの受け入れ体制のありかたを表現、世界の映像関係者に向けて情報発信、情報交換をする非常に重要な場となっています。実際、某海外有名映画製作会社の重役の顔なども見られました。私がお世話になったミネソタFCのブースはとても素晴らしく、表彰を受けていました。(写真－4)



写真－4　AFCI会長　Ward Emlingと私

写真－5　“ロケーションズ2000”のブースの状況

■最後に

日本におけるロケ地の実態ですが、撮影が許可になるかどうかは担当者の裁量による曖昧なところが非常に多く、撮影困難な場所はいきおい映像制作者がゲリラ的に撮影するなど、映画にとっても、不幸な歴史もありましたが、そんな中でも北海道は非常に多くの名作映画、TVドラマなどを輩出してきました。そして、ロケコーディネートを専門に生業とする人や会社も多い、全国的に希有なところで、このことは広大な北海道の映像素材としての飛躍的な可能性を示しているのです。

日本ではまだまだ映画の娯楽としての面だけでの認識が強く、映画の文化的側面や産業として地域経済が潤うなどの重要なまちづくり的視点からの認識が不足しているため、一私企業のために公共用地や建物をロケ地として貸すわけにはいかないという理由などで、一番ロケ需要の多いであろう公共の建物から撮影隊を排除してきた場合も多いと聞きます。本来、人の生活や人生そのものを映像媒体が描く以上、その設定の中では公共の場における登場人物の姿が生き生きと描かれる必然性も大いにあるでしょう。この時、前述のとおり制度としてFCが日本にあれば、また、地方にとって重要な政策として、FCが位置付けられれば、世界的映像素材の宝庫である北海道に海外の撮影隊が来る日も近いでしょう。地方が将来様々な効果とともに更に映画自体も新たなコンテンツを得、一歩前進するでしょう。

北の交差点は人間交差点といえます。

北国の人々が四季折々生活するこの道路空間の中で多くのロードムービー、ドラマが生まれ、世界の多くの人々の心をとらえてやまない日々がくることを、今日も石狩の路上から「ネガ」っています。

(筆者は、現在、私設FC「石狩サポーターズ」代表として、映画監督、プロデューサー、有志で作られた夕張サポーターズを初め、道内各地のロケを支えている人々と出会い、交流、情報交換を重ねています。)